栞集を読む

松岡　隆子

地崩れの杉の根あらは雪催　　小泉　恵子

大雨が降ったのであろう。山の斜面は地崩れが起きて杉の根がむき出しになっている。空高くと伸びた杉の木が心なしか傾いで見える。これで大雪でも降ったらどうなるのだろう。思わず見上げた空はどんよりと雲が垂れ込め今にも雪が降り出しそうだ。雪国の人々にとって「雪催」という季語は重く暗い。暮しに密着した「雪催」という季語が一句の要になっている。

秒針の妙に目立ちて十二月　　三宅まどか
そはそはと街の暮れゆく十二月　　鈴木　富代

十二月は一年の最後の月である。年内にしなければならないことが目白押しだ。暮れも押し詰まってくると大掃除や正月の準備に一段と忙しくなる。

十二月の心急く思いを三宅さんは時計の秒針に捉えた。ふと見上げた壁の時計。音もなく進んでいく秒針に追い立てられるような気持になる。いつもは気にもならない秒針に目が行くのは十二月だからなのである。

鈴木さんは十二月の慌ただしさを街の中に見ている。早々と点されたイルミネーションの中をそわそわと足早に行き交う人々。歳晩の街自体がそわそわしていると捉えた鈴木さんの視点はユニークだ。擬人化された街が生きている。

返り花心残りのあるごとく　　高野　達子

返り花でよく見かけるのは躑躅である。掲句からかつて見た躑躅の返り花を思い出した。通り過ぎようとしたときたった一つ咲いている真っ白な躑躅の花に気が付いた。その白さに遠くに行ってしまった誰彼のことが思われた。

高野さんも返り花に大切な人の面影を重ねておられたのだろう。返り花は春のような暖かい日差しに本能的に咲きだすのだろうが、本当は何か心残りがあって返り咲くのかもしれない。返り花との相聞に心惹かれた。

仕舞湯の柚子もほどほど温もりぬ　　西島　美晴

柚子の香りに包まれてゆっくりと湯船につかる。程よい湯加減に心身の疲れがほぐれてゆく。今年ももうすぐ終わる。過ぎた日のことなどをあれこれ考えているうちにすっかり体が温まってくる。ぷかぷか浮かんでいる柚子も気持ちよさそうだ。冬至の日に立てる風呂に柚子は欠かせない。〈柚子も